

論文

ヤオ族儀礼神画の研究

— 広西チワン族自治区恭城ヤオ族自治县蓮華鎮黄泥岡村盤王祭を事例として —

譚 静

TAN Jing

はじめに

ヤオ族は、現在中国に存在すると言われる 55 の少数民族の一つである。中国国内では、南部の湖南省・雲南省・広西チワン族自治区・広東省に、また東南アジア（タイ・ラオス・ベトナムなど）の主に山地に広く居住している。本論で取り上げるのは、広西チワン族自治区東北部に位置し湖南省に隣接する恭城ヤオ族自治县蓮華鎮黄泥岡村に居住しているヤオ族の事例である。



図1 中国地図

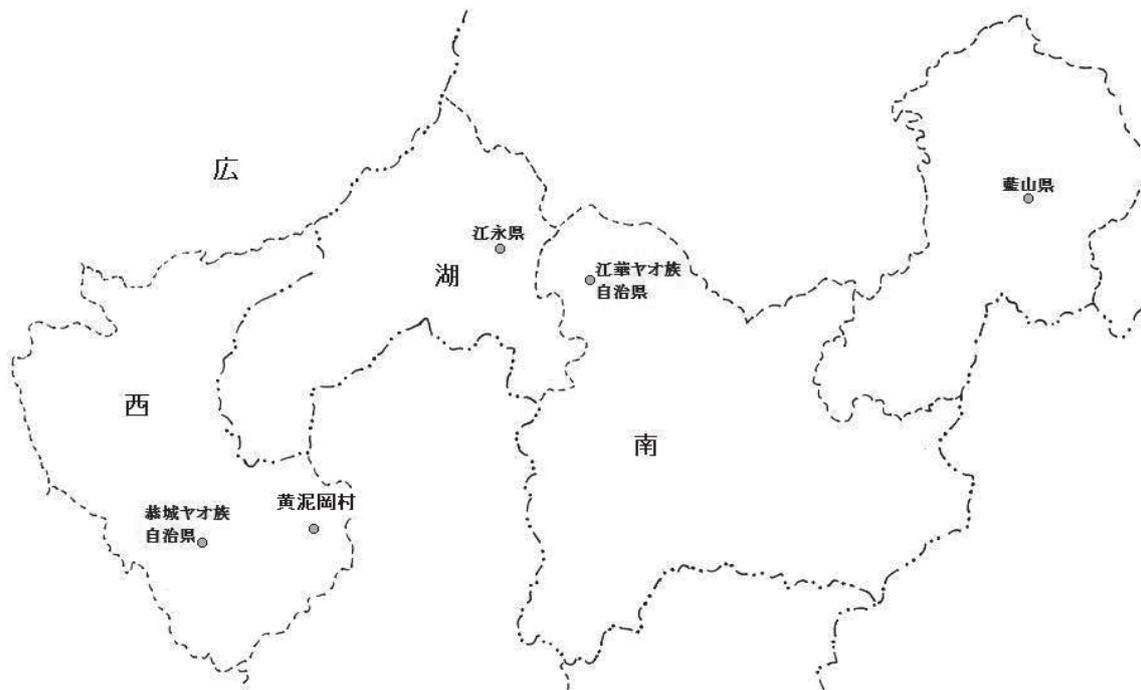


図2 広西チワン族自治区恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村の位置

この地域のヤオ族は、還家願儀礼などの伝統儀礼を伝承している。儀礼を行う際に、宗教職能者たちは儀礼場の正面に神々が描かれた神画を掛け、祭壇を作る。諸々の神を祭壇に招き、儀礼が順調に運営されるのを助けてくれるように請う。そして儀礼が全て終わると、感謝して神々を送り、神画を祭壇から下ろして片付ける。

2012年11月25日から27日にかけて、筆者は張晶晶氏（首都大学東京大学院社会人類学博士）のご紹介で黄泥岡村の盤王祭に参加することができた。今回の盤王祭は黄泥岡村で行われた初めての盤王祭である。しかしこの盤王祭は恭城ヤオ族自治県で行われた初めての盤王祭ではない。毛漢領と陸葉の研究によれば（毛漢領・陸葉、2011年、104頁～108頁）、恭城ヤオ族自治県内では1985年10月に三江郷で1回目の盤王祭が行われ、翌年10月に蓮華鎮で再び盤王祭が行われ、さらに1988年に観音ヤオ族郷水濱村で3回目の盤王祭が行われたという。後に水濱村では、3年毎に盤王祭が四回続いて行われたという。盤王祭はヤオ族の人々が、自らの始祖「盤瓠」を祭るために行う祭祀活動である。『搜神記・蛮夷の起源』（干宝、竹田晃訳、1964年1月、260頁）には、「米の粉の羹に魚や肉をまぜ、桶を叩いて呼びながら盤瓠を祭る。」と記されている。しかし現在の盤王祭は文献記録と比べて大きくその内容が異なっているばかりでなく、祖先祭祀の意味で自らの民族文化を重視した面と、ヤオ族地域の経済発展を意図する意味も加えられて形成された一面もみることができる。本論では、このような性格をもつ恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村で行われた盤王祭を事例として、祭りに用いられたヤオ族儀礼神画に関わる神画の所有者・製作経緯・製作年代・神画に描かれた内容を確認し、また儀礼における神画使用の意味を考察する。

I 神画とは

信仰の対象となる神をかたどった彫像・画像は「神像」と呼ばれ、これら神像は多くの宗教においてみられる。例えば、仏教の仏像やタンカ、キリスト教のイコンもこれに当たるものである。中国では、道教・仏教の内容を具現化する人物画は「道釈画」と呼ばれ、この類の画像も神像に当たると考えられている。この神像に対して本論では神画という用語を用いる。神画とは信仰の対象となる神々が描かれた画像のことを指す。「神像」と比べ、「神画」という用語の使用例はまだ少ないが、⁽¹⁾「神像」は3次元の彫像と平面の画像を両方指すので、神画より範囲が広く、平面画像の呼称にはふさわしくないと考える。また本論の研究対象は平面画像のみとなるので、誤解を招かないように神画という用語で統一する。

実際に儀礼で用いられる神々の描かれる画像の名称はまだ統一されておらず、いろいろな呼称が用いられている。漢族道教儀礼の場合は、神軸（徐宏図、1996年、153頁）・神榜（葉明生、1996年、263頁）・神図（毛礼鏊、1996年、923頁）などと呼ばれている。ヤオ族儀礼の場合は盤王図（左漢中、1994年4月、43頁～63頁）・盤ヤオ神像画（黄建福、2008年・周飛戰、2011年、70頁～74頁）・Yao Ceremonial Paintings（Jacques Lemoine, 1982年）などの呼称がある。宗教職能者 A 氏の話によれば、以前恭城ヤオ族自治県の師公（宗教職能者）の間では神画を「Liangdougun」と呼び、中国語に訳すと「羊皮卷」の字に当たるといふ。しかし現在の若い宗教職能者の間ではこの呼称は用いられず、通用もしないという。

まず漢族道教儀礼において用いられる呼称を分析してみる。「神軸」という用語は、神画の形態を表している。画像は巻軸に作られているため持ち運びしやすく、この類の画像は大体的な場合において掛け軸に作られているので、神軸と呼ばれてもおかしくはない。しかし、この用語は画像の形状を表わしているものの、画像の本質的な部分には触れていないと考える。「神榜」については、「榜」の字は文書類の文章などを指す。例えば、「榜文」という言葉があり、これは文書の中に使われ、布告を意味する。確かに、神画には銘文が書かれている場合があるが、内容はやはり画像中心なので、「榜」字を使うことは相応しくないと考える。「神図」という用語の意味に関しては、曖昧な部分がある。「図」の意味は画像を表すだけでなく、グラフなど表の意もあるので、「神図」という用語も神々が描かれた画像に合わない。

また「盤ヤオ神像画」という用語については、2008年に黄建福氏が広西民族大学に提出した『盤ヤオ神像画研究』という題目の修士論文において用いた呼称である。現在中国国内ではこの用語が広く用いられているが、国際的には、「Yao Ceremonial Paintings」（Jacques Lemoine, 1982年）が用いられている。本論では、Jacques Lemoine の日本語訳をふまえた上で、ヤオ族儀礼に用いられる神々が描かれる画像を研究目的とすることから、「ヤオ族儀礼神画」という語を用いることとする。

II 広西省恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画

本論の研究対象とする恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画は、同県に在住する宗教職能者の A 氏（ヤオ族・1965年生）と B 氏（ヤオ族・1943年生）が所有しており、それぞれ17点と18点の神画

を所有している。2012年11月の調査において確認できたのは、A氏が所有する神画の4点（海旛張趙二郎、総壇、太尉、唐葛周三將軍）とB氏が所有する神画の17点（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・李天師・張天師・天府・地府・王姥・太尉・黄元帥・馬元帥・十殿・海旛・庫官・鑒齋）である。

A氏によれば、彼が所有している神画は全部で17点あるが、今回彼は儀礼の還願師を担当しているため、「行師」の4点しか持って来なかったという。他の13点はどのような神画なのか確認できず、製作年代も不明である。また彼によれば、以前彼の家では代々伝承されてきた神画を所有していたが、文化大革命の際に燃やされたという。現在所有している神画は趙法秀という方からもらった神画であり、神画をもらってからすぐ家で「合兵合將道場」の儀礼が行われたという。

B氏は今回の盤王節の祭兵師を担当しているため、「三清」神画17点を持ってきた。B氏によれば、元々彼の家には17点の神画を所有していたが、文化大革命の際に父親に燃やされたという。1992年に彼は度戒儀礼を受けた後、鐘山県に住んでいる絵師の楊氏に頼んで新たに17点の神画を製作してもらったという。現在彼が持っている神画は年に100回ぐらいの儀礼に使われるため、破損は激しくないが、色が黒くなっていることがはっきりとわかる。

実際にB氏が持っている元始天尊神画にこの17点の神画に関する製作経緯などの情報が記されている。神画に書かれた銘文は以下の如くである。

因社會形勢□□下無法保留原有神像父親
將画毀□後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅
花鄉大營村丹清師父楊呈應到大田灣黃
法靈家照底彩書滿堂聖像□□十七尊天
橋一條承□家主黃法顯時值□□□幣
□于公元一千九百九十五年季春月吉日成工

（□は読めない文字）

（訳）

社会情勢により元来所有する神像を所有することができなくなり、父親が神像を壊した。後に1995年旧暦2月に、鐘山県紅花郷大營村に住んでいる絵師の楊呈應を大田湾にある黄法霊の家までに招聘し、拓本して神像17点及び天橋1条を製作した。家主である黄法顯は当時人民幣□□元を要した。1995年旧暦3月の吉日に完成した。

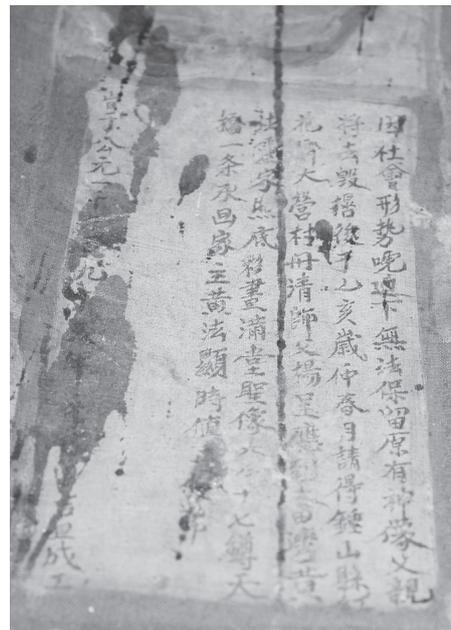


図3 神画に書かれた銘文

この銘文により、黄家が元来所有していた神画はどのような理由で壊され、またいつ、どこの誰に依頼してどのように新たに製作されたのかについてははっきりと分かる。こればかりでなく、神画を新たに製作するのに必要な金額と時間も記されている。しかし残念ながら、金額の部分は読み取れない。

普段ヤオ族の儀礼神画は宗教職能者の自宅に保管されている。儀式を頼まれたら、儀礼の当日に儀

礼を行う場所に運び、祭壇を設ける。祭壇は全て臨時に作られるので、神画を掛けるところもその場で作られる。大体において祭壇正面の左から右に1本の縄を張り渡し、縄に神画を掛け、軸を竹の棒或いは木の棒を差し込んで安定させる。儀礼が終わると、神画を下ろして1枚ずつ重ね、巻いてひとまとめにしておく。それをビニールで包み、布袋に入れるか、或いはふろしきで包む。

恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画は剥離など目立った破損は見られないが、あまり良い状態で保管されているとはいえない。現在の状態については、神画を祭壇に掛けた後、ごく近い所に供物台を置き、上に線香を立て香炉や蠟燭や灯明などを供える。さらに供物台の周囲で頻繁に紙銭を燃やすので、神画が黒く燻されていることが見受けられる。

恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画に描かれる人物は主に道教の神（三清・張天師など）とヤオ族の信仰神（太尉・海嶺張趙二郎など）である。ヤオ族が道教の神を描く手法は漢族道教神画と異なる。例えば、道教では位の高い神の頭部には光背が描かれている。この光背を描く時に、漢族神画の場合は細い線で光輪を描いて表すが、ヤオ族の場合は、多重線で描き、黄色で塗り、更に光背の外側に赤い炎を描く。ヤオ族の神画の描法は、神の法力を一層強く感じさせるように表現しているのではないだろうか。

Ⅲ 盤王祭に用いられた神画の読み取り

恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村で行われた盤王祭に合計20種類21点の神画が祭壇に掛けられた。神画に描かれた内容を詳細に把握するため、神画の読み取り作業が必要である。ここでは神画の写真を対照し、神画に描かれた内容を紹介したい。

神画の詳細な読み取りについては以下の通りである。

(1) 元始天尊神画（口絵1）

神画の全体的な構図としては、中央部に大きく元始天尊像を描き、下部の左右に各1人の従者を配し、従者の中央下部には銘文が書かれている。

元始天尊の両腕は内側に約60度曲げ、両手は上向きで手訣を結び、御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤と青色の瑞雲が描かれている。髪の毛は頭のとっぺんで結び、その上に冠（名称不詳）を被る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所はやや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。黒の袍を着、袍には龍と瑞雲の模様が見える。襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。

元始天尊の下の左右に、光背を配した男性従者がおり、それぞれ立ち姿である。従者は中心を向き、左の従者は赤い袍を着、右の従者は紺色の袍を着ている。2人とも両腕は内側に曲げ、両手を合わせて胸の前に置く。右側にいる従者は髪と鬚が白い老人であり、髪は頭のとっぺんで結び、その上に冠を被る。左側にいる従者は鬚のない若者であり、黒い髪の毛は同じ結び方で、上に冠を被る。従者2人の真ん中に銘文が書かれ、神画が作られた由来が記されている。銘文に書かれた内容は「二、広西省恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画」で述べたため、ここでは重複しない。

(2) 靈寶天尊神画 (口絵2)

神画の全体的な構図としては、靈寶天尊像は中央部に大きく描かれ、下部の左右に二人の従者が描かれている。

靈寶天尊の左腕は内側に約120度曲げ、手に如意をもち、右腕は内側に約90度曲げ、右手は上向きで左手に持つ如意の柄を支え、御座に座る姿である。元始天尊神画と同じく上半身と頭部に円環と炎状の光背を配する。髪の毛は頭のでっぺんで結び、その上に冠を被る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。黒の袍を着、袍の様子は龍と瑞雲である。襟を合わせたところに、獸牌(獸の顔を形どった装飾品)のようなものが見える。その下に綬帯を垂らして飾る。

靈寶天尊の下部の左右に、光背を配した男女の従者がそれぞれ立っている。左側にいる女の従者は赤い裙を着、両手は胸の前に出し、一輪の花を持つ。右側の従者は武将の格好で、鎧を着て、頭に兜を被る。

(3) 道德天尊神画 (口絵3)

神画の全体的な構図としては、神画の中央部に道德天尊像が大きく描かれ、下部左右に2人の従者を描く。

道德天尊の右腕は内側に約120度曲げ、右手に団扇を持ち、左腕は内側に約60度曲げる。左手は上向きで右手に持つ団扇の柄を支え、御座に座る姿勢である。

元始天尊・靈寶天尊神画と同じく上半身と頭部に円環と炎状の光背を配し、髪の毛は頭のでっぺんで結び、その上に冠を被る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て白である。深緑色の袍を着、袍の様子は龍と瑞雲である。襟の合わせたところに、獸牌のようなものが見える。獸牌の下に綬帯を垂らして飾る。

神画下部の左右に、光背を配す男女の従者がそれぞれ立っている。2人とも左を向いている。左側の従者は武将の格好で、手に斧を持つ。体の後ろに虎が見える。右側の赤い服を着る女性の従者は、両手を合わせて胸の前に置き、手に花を持つ。

(4) 聖主(星主)神画 (口絵4)

聖主神画は星主神画とも呼ばれる。神画の全体的な構図としては、中央部に聖主が大きく描かれ、下部には光背を配した2人の従者を描く。

聖主は両腕を内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ圭を持ち、御座に坐る姿である。頭部に円環と炎状の光背を配す。頭に冕を被っており、冕の左右からは各3本の冕旒を垂らしている。眉・眼・髪と髭の色はすべて黒である。赤色地に龍と瑞雲の模様の袍を着ている。

神画の下部に2人の従者が描かれている。2人とも赤い袍を着し、黒い冠を被り、内側を向き、文官の姿をしている。

(5) 玉皇神画 (口絵5)

神画の全体的な構図としては、上部に「玉皇左」と書かれ、中央部に玉皇像が大きく描かれ、下部

左右に2人の従者が描かれている。

玉皇は両腕を内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、御座に坐る姿である。両手は袖の中に隠れて見えない。玉皇の上半身と頭部には円環と炎状の光背を配する。頭に冕を被っており、冕板に6本の冕旒を飾り、額まで垂らす。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。龍と瑞雲模様の黄色の袍を着ている。

神画下部左右には、頭部に光背を配した2人の女の従者を描く。左の従者は、赤い袍を着し、右の従者は緑色の袍を着ている。2人共両手を胸の前で合わせて手に圭を持っている。2人の従者の真ん中下部には、位牌のようなものが描かれているが、そこに文字は記されていない。

(6) 張天師神画 (口絵6)

神画の全体的な構図としては、上部に「張天師」と書かれ、天師像は神画内に大きく描かれている。

張天師の両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持つ。手は胸まで上げ、立ち姿で左を向く。張天師は3つの眼を持ち、3つ目の眼は額の中心にある。頭に冠を被り、両鬢の髪の毛は犬耳のように立っている。眉尻を高く上げ、眼は丸く大きく見開いている。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉・髭・髪の色は全て黒である。頭部に輪状の光背を配し、光背の周囲に炎が描かれている。張天師は白色の袍を着て、黄色の裳を穿く。袍に八卦を表す模様(☰・☷・☱・☴・☵・☶・☲・☳)が描かれている。

(7) 李天師神画 (口絵7)

神画の全体的な構図としては、図の全体に李天師が描かれており、上部には「李天師」と記されている。

李天師の両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で右を向く。頭に冠を被り、眉・髭・髪の色は黒色である。頭部に輪状の光背を配し、光背の周囲に炎が描かれている。袍に瑞雲と八卦を表す模様(☰・☷・☱・☴・☵・☶・☲・☳)が描かれている。李天師は左を向いている。普段祭壇に掛ける時には、聖主・道德天尊・元始天尊・靈寶天尊・玉皇神画を挟み、張天師神画とともに左右に配置される。

(8) 馬元帥神画 (口絵8)

全体的な構図としては、最上部に「馬元帥」と記され、神画の中央に馬元帥を大きく描き、下部には2人の元帥が小さく描かれている。

馬元帥は武官の帽子を被り、肌が白い男性である。頭部に輪状の光背を配し、緑色の上着を身に着け、腰に白色の腰巻を巻く。馬元帥の左腕は内側に曲げて胸の前に置き、右腕は上方に上げ、手に鉞を持ち、右を向いている。

下部に光背を配した2人の元帥がおり、2人共右を向いている。左側の元帥は若い男性であり、帽子を被っておらず、髪の毛を頭のてっぺんで結び頭巾で隠す。白色の上着を着、腰に白色の腰巻を巻き、黄色の裳を穿く。素足で靴を履いていない。左腕はやや上へ上げ、手に黄色の盞を持つ。右側にいる元帥も武官の格好で、黒の上着を着、赤色の裳を穿く。黒の武官の帽子を被っており、帽子の両

側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬢まで続く。眉尻が上にあがり、目は丸く見張ったようである。髪の毛と顎髭の色が真紅であり、口髭の色が黒である。右腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、左手は剣の先端を支える。

(9) 黄元帥神画 (口絵 9)

神画の全体的な構図としては、上部に「黄元帥」と書かれている。黄元帥は中央部に大きく描かれ、下部左右に1人ずつの元帥が描かれている。

黄元帥は黄色の上着を着、黄色の裳を穿き、腰に白い腰巻を巻く武官の姿である。頭部に輪状の光背を配し、右腕は内側に曲げて胸の前に置き、左腕は上方に上げ、手に剣を縦に持つ。左手は体の後ろに出す。黄元帥は髪冠を被っており、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬢まで続く。眉・髭・髪の色は全て赤色である。眉尻が上にあがり、眼は丸く見張ったようである。3つの眼を持ち、3つ目の眼は額の中心にある。

下部に光背を配した2人の元帥がいる。左側の元帥は黒い武官の帽子を被る男性である。右側にいるのは鄧元帥である。鄧元帥は鳥の嘴で3つの眼を持つ。上半身は裸で、黄色の裳を穿く。右手に斧を持ち、高く上に上げており、左手に錐を持つ。両足は鶏脚であり、素足で火車を踏む。髪と眉毛が真紅である。

(10) 海旛神画 (口絵 10)

神画には海旛及びヤオ族の「翻刀梯」儀礼の場面が描かれている。神画の左側には、高い櫓とそこに掛けられた「刀梯」が描かれている。「刀梯」とは28本の長い刀を交差させて組んだ梯子である。2人の刀梯を登る人物が描かれ、1人はあと少しで櫓に届くので、刀梯を掴み、下の登梯者を眺めている。下にいる人はまだ2段くらいしか登っておらず、両手で梯子を掴み、足先で慎重に刀の上を登っている。2人共赤い袍を着し、素足である。

興味深いのは二人とともに、海旛神も一緒に刀梯を登っていることである。海旛神の両足はやはり素足で、足首から膝まで白い布を巻く。右足は刀梯の中段あたりを踏み、右手は刀梯の最上段を掴み、左手は胸の前で手訣を結んでいる。

櫓の上からは地面に届くくらいの長い黄色の幡が垂れている。幡の下には上半身裸の男性を描く。男性は両手の拳を握り、両腕を両側に開く姿勢を作る。

神画の左下には祭壇を描く。祭壇の前に2人の男性が描かれており、彼らは両手に圭のようなものを持ち、跪いて礼拝の姿勢をとっている。2人の後ろに楽師が5人おり、チャルメラを吹いたり、笛を吹いたり、鑼鼓を鳴らしたりする様子が描かれている。

(11) 鑿齋神画 (口絵 11)

鑿齋神画の全体的な構図としては、一番上には「鑿齋右」と書かれ、上半部に鑿齋大王が描かれ、下半部にはヤオ族祭り時の調理場面が描かれている。

神画の下段を見ると、ヤオ族祭りの調理場面が生き生きと描かれている。そこでは長い杵を持って餅をつく人、竈の前で薪を燃やす人、斧で木を切る人、水を汲んで担いでくる人が描かれている。そ

して籠で丸い餅を作る女性も描かれている。彼らはヤオ族の民族衣装を着、忙しそうに調理をしている。調理以外では、ヤオ族の若い男女の姿も描かれている。

これらの場面を監督する鑿齋大王は、黄色の虎に乗った姿で描かれている。鑿齋大王は武官の帽子を被り、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、黒色の長靴を履く。鑿齋大王の左腕は体の前に出し、手に環を持っている。右手は上に高く上げ、剣を持っている。

(12) 王姥神画 (口絵 12)

王姥神画の最上部には「王姥右」と描かれている。中央に王姥が大きく描かれ、王姥の後ろの右側には傘を差す女性の従者がおり、神画の下部には3人の武将の格好をしている従者が描かれている。

王姥は赤地の緑襟が付いた花模様の上着を着、同じ色と模様のスカートを穿く。左腕は内側に90度曲げ、手を袖の中で隠し、瓢箪状の団扇を持つ。右腕は内側に約120度曲げ、手は手訣を結ぶ。髪を雲型に結び、金の簪をつけている。若々しく微笑んで瑞雲の上に乗っている。

下部に描かれる3人の従者は鎧を着、剣を持つ武将の格好である。3人とも雲に乗っている。

(13) 海旛張趙二郎神画 (口絵 13)

この神画の構図としては、中央に海旛張趙二郎を描き、下部に2人の従者を描いている。

中央に描かれる海旛張趙二郎は左を向き、頭部に輪状の光背を配し、赤い短いズボンを穿き、黒龍に乗った姿で描かれている。右腕は内側に約90度曲げ、胸の前に置く。左腕は高く上げ手に赤い盞を持つ。素足で足首から膝まで縞模様の布を巻き、赤い紐で縛っている。しかし神画には海旛張趙二郎の靴が描かれている。靴の片方は膝の前に、もう1つは黒龍の尻尾の先に被せている。

海旛張趙二郎が乗っている黒龍は、頭をもたげ、大きな目が上方を見る。額の中心に角を一本生やしている。口を大きく開き、上下の牙が見える。神画の右上には、大きな球状のものを描き、球の周囲に炎が描かれていることから、火玉と推察される。

神画の下部には、馬に乗る武将姿の従者を描く。海旛張趙二郎の向きと同じく左を向いている。左の武将は白馬に乗り、赤い袍を着ている。左腕は高く上げ、右腕は後ろに伸ばし、手に長い棒を持っている。右の武将は黄色の馬に乗り、赤い袍を着ている。両手に長い棒を持ち高く上げ、振り返り後方の武将を見ている。

(14) 唐・葛・周三將軍神画 (口絵 14)

三將軍とは即ち、上元唐將軍・唐文明、中元葛將軍・葛文慶、下元周將軍・周文剛のことである。神画の構図としては、上・中・下の3つの部分に分かれ、上元・中元・下元を表し3人の將軍が描かれている。

上部には白馬に乗る唐將軍を描き、右を向く。兜を被り水色の上着を着、赤色の裳を穿く。右腕を高く上に上げ、手に武器を持っていると考えられる。左腕は後方に出し、手に剣を持つ。

神画の中央には葛將軍を描く。葛將軍は黄色の馬に乗り、兜を被り、赤色の上着を着、藍色の裳を穿き、右を向く。右腕を曲げて胸の前に置き、手に剣を持つ。左腕は後方に出し、手に剣を持つ。

神画の下部には周將軍が描かれている。周將軍は白馬に乗り、兜を被り、藍色の上着を着、赤色の

裳を穿き、右を向く。周將軍は右腕を高く上げ、手に錘を持つ。左手は指笛を吹くしぐさをする。

(15) 太尉神画 (口絵 15)

太尉神画の全体的な構図としては、中央部に太尉が大きく描かれており、太尉の後ろには掌旗童子が配されており、下部に馬に乗る2人の従者が描かれている。

神画中央に描かれている太尉は、武官の冠を被り、赤い袍を身に着け、白馬に乗っている。右腕は上に上げ、手に長い剣を持っている。左腕は内側に曲げ胸の前で手訣を結ぶ。腰には帯で黄色の腰巻を留め、脚には黒い長靴を履く。太尉の後ろには幡をかかげる掌旗童子がいる。童子は赤色の袍を着、黄色の旗を持つ。

神画の下段には、二人の白馬に乗る武官が描かれている。左の武官は身に赤い鎧を着けている。右腕は高く上げ、手に剣を持っている。右の武官は青色の鎧を着、手に持っているものについてははっきりとは確認できない。

(16) 総壇神画 (口絵 16)

総壇神画は儒仏道そしてヤオ族の神々が一堂に描かれているとされる衆神図である。神々の位により、上から下まで9つの階層に分けて描かれている。神画の構図としては、それぞれの階層の中心に主たる神を描き、左右両側の神々は中心に向かって拝謁する姿勢をとる。

壇神画の第一層には、三清（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊）・玉皇・聖主が描かれている。元始天尊は真ん中に、左に道德天尊、右に靈寶天尊が描かれている。玉皇と聖主は左右両側から中心に向かい、両手に圭を縦に持ち、三清に拝謁する姿勢をとる。

第二層の中心となる神は白衣の観音であると思われる。観音の肩の左右には若い女性と男性が描かれ、玉女と金童であると思われる。又その左右にいるのは李天師と張天師であると思われる。他の神々の名前のはっきりと分からないが、冕を被る神が多いので、おそらく天帝たちではないかと推測する。

第三層の中心となるのは、日と月を持つ三面六臂の盤古である。盤古の左右には各3人の冕を被る神が描かれている。

第四・五・六層の中心に描かれた神の名は不明である。第四層の両側に男女の神々が描かれ、第五層及び第六層の両側に馬に乗る武官が描かれている。第六層の一番右側に3人の娘が描かれており、雲頭龍鳳三姉妹であると考えられる。

第七と第八層の中心となるのは位牌のようなものである。両側に馬に乗る文官の姿が描かれている。

総壇神画の第九層の中心に神は描かれていない。左から右まで、屋根・毒虫・牛に乗る神・象に乗る神などが描かれている。廣田律子の著書によれば、これらの動物に乗る5人は五猖と思われる武將であるとする（廣田律子、2011年、350頁）。

(17) 庫官 (口絵 17)

庫官神画には庫官庁内の風景などが描かれている。

神画の最上部に「庫官左」と記されている。上部に長いテーブルが描かれ、テーブルの後ろに黒い

帽子を被り、赤色の上着を着ており、黄色の裳を穿く官員が立っている。この官は庫官であると推測する。彼は左手でテーブル上に置いてある文書を触り、右腕を内側に120度曲げ、手に筆を握っている。庫官の左右には各1人ずつ従者が立っている。

テーブルの前に、1人が跪いており、両腕を広げて手に書類のようなものを持ち、庫官に上奏している。上奏者の左右には、椅子に坐る各1人の官が描かれている。左側の官は黒の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は内側に曲げて腰部に置く。左腕は高く上げ、右側にいる官に話しかけている姿勢をとっている。右側の官は緑色の上着を着て、赤色の裳を穿き、左側にいる官を向き、話を聞く姿勢をとっている。

神画の中央の左右には、壁が描かれている。そこは官庁に入る門であると考えられる。門のところに1人の役人と1人の従者が描かれている。

神画の下部には、庫に入れる貨物を管理する風景が描かれている。貨物を担ぐ人、また馬で運んでくる人が描かれている。その上にテーブルが描かれ、テーブルの後ろに1人の役人が立っている。彼は左手でテーブル上の紙を押し、右腕は内側に曲げ、手に筆を握っており、運んできた貨物の記録を記している。右側に2人の従者と赤色の箱が描かれ、従者は左側にいる役人のほうを向き、確認できた貨物を報告する姿勢で描かれている。

(18) 拾殿神画（口絵18）

拾殿神画の最上部に「拾殿右」と記されている。神画の右下から右上、そして神画の上、また神画の左上から左下まで順に、「一殿」から「十殿」まで十人の閻王が描かれている。この十人の閻王は神画の中央に向かって描かれている。

『地獄と十王図』には、「十王とは冥界（あの世）で死者の罪業を裁くといわれる十人の裁判官であり、死者はその裁きによって行くべき世界が決まるといわれている。十王は秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・変成王・太山王・平等王・都市王・五道転輪王の十人の裁判官のことを指す。」（『地獄と十王図』、1991年12月）と記されている。この神画には、「一殿」から「十殿」まで具体的にどのような王が描かれているのかは明記されていない。

神画の一番下には「地獄門」が描かれ、左側に馬頭、右側に牛頭が立っている。またその両側に、上半身が裸の罪人の両手を引っ張って地獄に入れようとする獄卒の鬼が描かれている。

地獄の門の上部は、幾つかの空間に分けられ、それぞれに地獄の風景が描かれている。下から上まで順番に見ると、第一層の左側に、鋭い刀の山があり、獄卒の鬼は罪人を刀の山の上に投げ、そこに突き刺さった罪人の血が満ち溢れる様子が描かれている。右側には、獄卒の鬼は猛火に罪人を入れる様子が描かれている。第二層には、2つの大きな釜が描かれ、獄卒の鬼は罪人を釜に入れて鉄の棒で刺して煮る様子が描かれている。第三層には、獄卒の鬼は罪人を臼で粉碎している様子が描かれている。第四層には、2人の獄卒の鬼が鋸で罪人を切り裂く様子が描かれている。第五層には、獄卒の鬼が秤で罪人の罪を量る様子が描かれている。

(19) 地府神画（口絵19）

地府神画の構図は天府神画（口絵20）を反転させたものである。神画に描かれた2人の神の格好

や姿勢などは天府神画と同様である。神画の上部には、「地府右」と記されている。

神画の上部に描かれている、目を見張っている鐘馗のような神は、地府酆都大帝であると考えられる。この神は緑色の袍を着ている。地府の後ろに旗をかかげる掌旗童子と1人の従者がいる。下部に描かれている冕を被る帝王像は、赤い袍を着、白色の裳を穿く。冕の両側には犬耳のように髪が立っている。顎髭が龍の髭のようである。髪・眉・髭の色は全て真紅である。神画の右下にテーブルが描かれ、テーブルの上には山の形の筆置きが置かれている。テーブルの前には判官が座っており、隣の役人と話している様子が描かれている。さらにその右下に箱を担ぐ運銭童子が描かれている。

(20) 天府神画（口絵 20）

天府神画は地府神画と対応する神画であり、一点の神画にそれぞれ2人の神が描かれ、全部で4人の神が描かれている。即ち天府天王大帝・水府扶桑大帝・地府酆都大帝・陽間都祿城隍である。

天府神画の一番上には「天府左」と書かれている。構図としては、2人の神を上下にずらして描いている。上部にいる神の後ろに旗をかかげる掌旗童子と1人の従者がいる。神画の左下に黄色のテーブルが描かれ、テーブルの前に坐る把筆判官と役人などが描かれている。

神画の上部に描かれている神は、冕を被る帝王像である。頭部に輪状の光背を配する。両腕は内側に曲げ、両手を合わせ、胸の前まで上げ圭を縦に持つ立ち姿である。右を向き、龍と瑞雲の模様の赤い袍を着ている。

神画の下部に描かれている神は、同様に冕を被る帝王像である。頭部に輪状の光背を配し、姿勢も体の向きも同様である。龍と瑞雲の模様の紺色の袍を着し、ピンク色の裳を穿く。

IV 盤王祭における神画の使用

今回の盤王祭は現地で行われた初めての盤王祭である。行われた場所は黄泥岡村にある通天廟及び

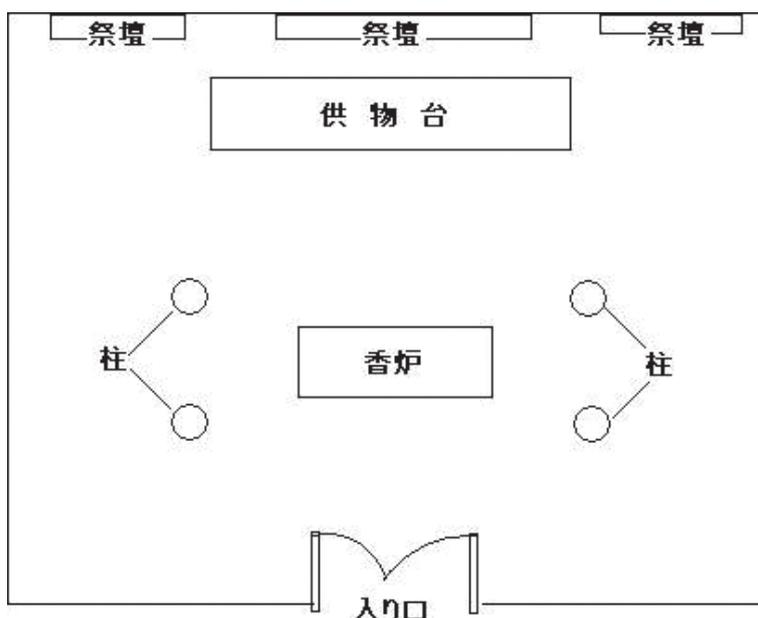


図4 通天廟平面図

廟前の空き地である。廟主の王氏は湖南省宝清の出身で地元の医者であり、現在黄泥岡村で自分の医療所を持っており、村の知識人で威信がある方である。土地改革の際に王氏は現在の通天廟の土地を分配された。王氏によれば、元来この土地は農地ではなく、廟が建てられていたが、1956年の「破四旧」運動の際に破壊されたという。2008年12月（旧暦）に王氏は村人の協力の下、通天廟を新たに再建した。再建資金は主に王氏が出資したが、近隣の村の多くの方々も応援してくれた。現在この廟は現地の公的な祭祀場所として利用されており、そのために盤王祭を行う場所として選定された。

盤王祭の中では、宗教職能者は祭祀内容に合わせて還願師・祭兵師・五穀師などの役割を分担する。今回はそれぞれA氏（1965年生、恭城ヤオ族自治州三江郷洗脚嶺村）・B氏（1943年生、恭城ヤオ族自治州三江郷三江村）・C氏（1963年生、恭城ヤオ族自治州蓮華鎮龍困村）が担当した。儀礼を進める上で、供物の準備を担当し儀礼の進行係をD氏が担当した。

祭祀場（図4 通天廟平面図）は、廟の入口から入って奥の祭壇の前である。向かって廟の奥に長方形の供物台が設けられ、正面祭壇の上には五穀・盤古大王・伏羲が祭られ、下には土地公と土地婆が祭られている。また左側の祭壇には観音が祭られ、右側の祭壇には財神が祭られている。

儀礼程序（表1）によると、今回の盤王節でヤオ族儀礼神画の使用は、掛聖（神画を掛ける）→収聖（神画を片付ける）という構成となっている。以下ではこの2つの構成について紹介する。

表1 盤王節程序

番号	時間	儀礼内容
1	11/25 午前	掛聖（神画を掛ける）。
2	11/26 6:30	豚を廟の右側祭壇の前に供える。廟前の空き地で盤王祭の準備などが行われる。
3	11/26 11:27	男女司会者が挨拶し、盤王節が始まる。
4	11/26 11:30	爆竹を鳴らす。
5	11/26 11:32	宗教職能者が登場し、上香（線香を供える）する。左手に笏を持ち、右手に鈴を持ち、罡歩を踏み、祭壇に向かい、二回跪いて礼拝する。
6	11/26 11:36	上香完了、礼拝し、退場。
7	11/26 11:37	上香舞が行われる。
8	11/26 11:47	師公迎神舞が行われる。この舞は盤王と仙翁の降臨を迎えるための舞であるという。師公たちは、左手に笏を持ち、右手に鈴を持つ。鈴を鳴らしながら、舞う。
9	11/26 11:49	師公迎神舞完了。
10	11/26 11:50	村の書記（黄氏）が「盤王祭文」を読む。
11	11/26 11:54	信首たちが上香する。
12	11/26 11:55	全員起立し、祭壇に向かって三回礼拝する。
13	11/26 11:56	瑞獅舞が行われる。
14	11/26 11:58	長腰鼓舞が行われる。
15	11/26 12:06	ヤオ歌を歌う。
16	11/26 12:10	送瘟・送聖。
17	11/26 12:14	紙銭を燃やす・占う。
18	11/26 12:15	牛角を吹き、礼拝し、送瘟・送聖完了。
19	11/26 12:15	長鼓舞が行われる。
20	11/26 12:23	獅子舞が行われる。

21	11/26 12:24	盤王節が終了。参加者を食事に招待する。
22	11/26 夜	文芸演出が行われる。
23	11/26 22:00	山歌を歌う。
24	11/27 4:30	山歌を歌う。
25	11/27 9:00	収聖、祭壇を片付け、盤王祭が終了。

(1) 掛聖（神画を掛ける）

「掛聖」とは神画を祭壇に掛けることである。今回の「掛聖」は11月25日の午前に行われた。祭壇に掛けられた神画の位置は、図5に示したように、祭壇の右側から左側まで、黄元帥・張天師・庫官・天府・太尉・海旛・玉皇・元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・聖主（星主）・唐葛周三將軍（A氏所蔵）・太尉（A氏所蔵）・総壇（A氏所蔵）・海旛張趙二郎（A氏所蔵）・王姥・拾殿・地府・鑿齋・李天師・馬元帥とし、全部で21点ある。重複の神画を除き、祭壇に20種類の神画が掛けられていることが分かる。

ヤオ族儀礼神画配置に関しては、張勁松⁽⁵⁾と廣田律子⁽⁶⁾の著書及び拙稿⁽⁷⁾においても報告されたことがある。それと比べると今回の盤王節の祭壇に掛けられた三清神画の「靈寶天尊」と「元始天尊」の掛け位置は、逆になっていることが分かる。漢族道教の中で三清神画の掛け方は、中心に元始天尊、向かって左側に道德天尊、右側に靈寶天尊神画となっている。この掛け方を基準とすれば、今回の盤王祭の三清神画の祭壇配置における特徴が見えてくる。

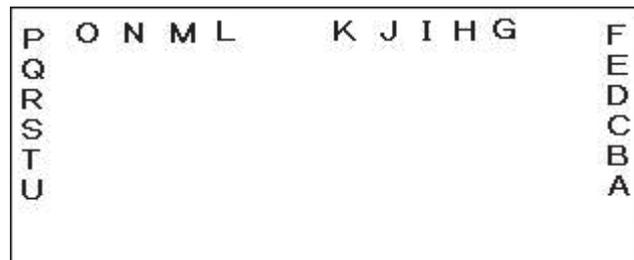


図5 神画配置図

A:黄元帥 B:張天師 C:庫官 D:天府 E:太尉 F:海旛
G:玉皇 H:元始天尊 I:靈寶天尊 J:道德天尊 K:聖主
L:唐・葛・周三將軍 M:太尉 N:総壇 O:海旛張趙二郎
P:王姥 Q:拾殿 R:地府 S:鑿齋 T:李天師 U:馬元帥

(2) 収聖（神画を片付ける）

盤王祭が終了するのは、11月26日の深夜であった。収聖は翌日の午前に行われ、祭壇を片付けながら、神画を下ろして巻いて袋に入れた。後に宗教職能者たちはそれぞれの神画を持って帰宅した。

V 神画の考察から

(1) 一組となる神画

恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画の読み取り作業を通じて黄 TW が所有する神画に書かれた銘文から、神画の製作経緯・制作年代・絵師などの情報を知ることができた（情報に関する内容は前述してあるため、ここでは重複しない）。また神画を新たに製作する場合、一組という単位で製作されているのではないかと考える。以下では他のヤオ族の地域の銘文の例を挙げて分析する。

⁽⁸⁾
例1:

信仕香主趙法龍出心龍請匠人 彩画満堂共像十四軸仙橋一

度保佑香主人丁青吉歳々 平安猪財驢馬五穀豊登

香門興百事亨通福所帰 丹青趙天栄全男文有

道光甲辰年十一月二十八日開光吉旦

(訳)

信士香主趙法龍は誠心をもって絵師を請い、神画十四点・仙橋⁽⁹⁾一点

香主家の家族が増え、年々平安であり、豚と驢馬はよく育ち、五穀は豊作になるように見守る

香門は盛んで、何事も順常に行く。福は帰す。絵師趙天栄同息子文有

道光甲辰（1844）年 11 月 28 日吉日に開光儀礼を行う。

⁽¹⁰⁾
例 2 :

大清国広皮脂道平楽府修仁県七排管入老 □河八凹村新安馬得社下立宅居住奉

家主黄河向誠心請到丹清弟子馮成銀彩化大 堂仏像行相坐相一共十六張価銀式百七十毫

正保佑家主師門興旺五穀豊登永才進手百事亨通 皇上民国丁丑年二月二十八日開光大吉大利

(訳)

大清国広皮脂道平楽府修仁県七排管入老□河八凹村新安馬得社下の家に住んでいる

家主の黄河向は誠心をもって絵師馮成銀を請うことができ、銀錢で行く姿勢と坐る姿勢の大堂仏

像 16 点を買う。銀は 270 毫を使った。家主師門の隆盛・五穀の豊作・永遠の財を手に入れ、何

事も順常に行くことを祈る。皇上民国丁丑（1937）年 2 月 28 日開光儀礼を行い、縁起が良い。

⁽¹¹⁾
例 3 :

今據大清天下湖南直桂陽州藍山縣仙政郷信仁福主盤法禄夫妻謫議発心得買神像一堂四軸言定□錢

壹両五分正以後傳與後人子孫四方相請香火不断馬脚不停香火通行萬事大吉福有所帰 丹青弟子

臨武周国珍 道光九年廿八日開光大吉

(訳)

今大清天下に於いて、湖南直桂陽州藍山縣仙政郷に住む信仁福主盤法禄夫妻の申し出によって、

誠意をもって4 軸の神画を買うことができた。相談した上で錢を 1 両 5 分払うと定めた。その後

この神画は子孫たちに伝承する。四方から相請われて招聘され、香火が絶えず、馬脚は止めず、

香火が永遠に伝えられる。萬事は大吉であり、福が帰すように願う。絵師臨武（地名）の周国珍

によって描かれ、道光九（1829）年 28 日に開光する。

以上 3 つの銘文から、例 1 の銘文に記されている趙法龍という人は絵師に頼み、銀錢を払って神画を購入した。注目したいのは棒線で示したところであり、そこに新たに製作された神画 14 枚及び仙橋 1 条と書かれている。例 2 の銘文の棒線で示したように、神画を 16 枚購入した。例 3 銘文の棒線で示したように、4 軸の神画を新たに製作してもらった。記述にあるのは、新たに神画を製作する場合、一組という単位で行われることが分かる。

(2) 神画の基本種類

異なるヤオ族地域では、神画の種類もその地域の特徴があると考えられる。例えば、今回筆者が広西省恭城ヤオ族自治州で、初めて女神が描かれたヤオ族儀礼神画（王姥神画）と庫官神画を収集することができた。このような神画は湖南省藍山県のヤオ族地域では見られず、広西恭城ヤオ族地域特有の神画の可能性があると考えられる。

湖南省藍山県及び広西省恭城県の5人の神画所有者の神画所有状況を表にしてみると、一組という単位の神画の基本的な組み合わせが分かる。表2の三重線と二重線で示す2つのエリアを見ると、ヤオ族儀礼神画は大きい組と小さい組に分けられていることが分かる。大きい組は元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・鹽齋・拾殿・海旛・把壇師（馬元帥）・王靈官（黄元帥）の14種類の神画を含む。小さい組は海旛張趙二郎・太尉・唐葛周三將軍・総壇の4種類の神画を含む。宗教職能者のA氏よれば、海旛張趙二郎・太尉・唐葛周三將軍・総壇の4点

表2 神画所有状況表

所有者 神画名	広西省恭城県 A氏	広西省恭城県 B氏	湖南省藍山県 D氏	湖南省藍山県 E氏	湖南省藍山県 F氏
元始天尊	?	●	●	●	×
靈寶天尊	?	●	●	●	×
道德天尊	?	●	●	●	×
玉 皇	?	●	●	●	×
聖 主	?	●	●	●	×
張 天 師	?	●	●	●	×
李 天 師	?	●	●	●	×
天 府	?	●	●	●	×
地 府	?	●	●	●	×
鹽 齋	?	●	●	●	×
拾 殿	?	●	●	●	×
海 旛	?	●	●	×	×
把 壇 帥 (馬元帥)	?	●	●	●	×
王 靈 官 (黄元帥)	?	●	×	●	×
海旛張趙二郎	●	×	●	●	×
太 尉	●	●	●	●	×
唐葛周三將軍	●	×	●	●	×
総 壇	●	×	●	●	×
王 姥	?	●	×	×	×
庫 官	?	●	×	×	×
大道橋梁	?	●	●	×	
合計種類	4種類	18種類	18種類	17種類	4種類

- ※ ●：神画を持つことを示す
 ×：神画を持っていないことを示す
 ?：神画を持っているかどうか不明であることを示す

の神画は「行師神画」と呼ばれ、三清神画（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊）を含むほかの神画は「三清神画」と呼ばれるという。宗教職能者は儀礼の分担によって「行師神画」及び「三清神画」を儀礼に用いるという。このことは湖南省藍山県でも共通している。この点からみると、地域が異なっても神画に関する基本的な使用方法は同じではないかと考えられる。

(3) 神画の使用

廣田律子によれば、ヤオ族の神像が描かれた軸を掛けて行われる儀礼は、全儀礼に共通する骨組みを持った上で各儀礼の目的に即した特徴ある肉付けがなされているとされる。神画を祭壇に掛けること（掛聖）、及び神画を祭壇から下ろすこと（収聖）はヤオ族の大・中規模儀礼で共通して行われる儀礼内容の重要な一環であるとされる（廣田律子、2013年3月、1頁～25頁）。実際に恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村で行われた盤王祭の祭壇を見ると、神画にかかわる掛聖及び収聖儀礼が確実に行われていたことがわかる。しかし、祭壇にヤオ族儀礼神画を掛けることは必須ではないと考える。

1992年11月広西省賀県（現賀州市八歩区）で1回目の「湘粵桂南嶺ヤオ族盤王祭」が開催されてから現在に至るまでに、広東省・広西省・湖南省の10の市県で12回の盛大な盤王祭が行われた。また2006年5月20日にヤオ族盤王祭は中国国家級の非物質文化遺産として登録され、さらに重視されるようになってきた。広東省・広西省・湖南省のそれぞれのヤオ族地域で主催された盤王祭の内容を見ると、元来の盤王祭祀の意味を維持したうえで、そこにさらにヤオ族の文化及び芸術を重点として宣伝する要素が加えられた。即ち大型のヤオ族伝統歌舞ショーを開催することである。大型歌舞ショーにおいて、各ヤオ族地域から集まってきた参加者はヤオ族刺繍の民族衣装を着用し、ヤオ族の歌を歌い、長鼓舞を舞い、このような活動を通して自らの様々な民族文化を宣伝する。周辺地域だけでなく中国全土及び海外からも大勢の観光客を集め、ヤオ族地域の旅行・飲食を含む多くの産業に大きな利潤をもたらした。この12回行われた盤王祭の中で、2006年12月6日から8日まで広東省連州市で行われた第8回目の中国ヤオ族盤王祭でのみ、「梅山図」と呼ばれるヤオ族の神々などの人物が描かれた約530メートルの絵巻が飾られた。それ以外では、ヤオ族儀礼神画を展示することはなかった。

この12回の盤王祭は、省単位で行われた大規模な盤王祭であるといえる。その他には、近年の各ヤオ族地域では県単位及び村単位で行われる盤王祭が見られるようになってきている。2012年は、盤王誕生日（旧暦10月16日）前後、湖南省永州市江華ヤオ族自治県（11月26日～28日）・広西省恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村（11月25日～27日）などの地域でそれぞれの盤王祭が行われた。前者は県単位で後者は村単位の祭りと考えられる。江華ヤオ族自治県民宗局主任の鄭氏によれば、2012年度江華ヤオ族自治県の盤王祭では、盤王殿に作られた祭壇に三組の神画が展示されたという。一組の神画が18枚と計算すれば、50枚余りの神画が展示されたと推測できる。恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村の盤王祭では、前述したように通天廟に作られた祭壇に21点の神画が掛けられたことがすでに確認できた。

以上で述べた省・県及び村で行われた大規模と小規模の盤王祭をまとめると、大規模の盤王祭では神画が用いられず、県および村の小規模で行われた盤王祭では神画を用いられたことが分かった。ヤオ族儀礼神画の使用は盤王祭の規模によって異なるものではないかと考えられる。

江華ヤオ族自治県及び黄泥岡村で行われた盤王祭を分析してみると、この2つの地域とも固定され

た空間で盤王祭を行ったことがわかる。前者は盤王殿で、後者は通天廟という場所であった。このような場所では、祭壇の設備があり神画も掛けやすい状態であると考えられる。またヤオ族の盤王祭は国家の非物質文化遺産として登録されたため、盤王祭はヤオ族の人々が自らの民族意識を高める機能を果たしていると考えられる。故に盤王祭においてヤオ族の人々は民族衣装を着用して自らの民族の歌を歌って長鼓舞を舞うばかりでなく、ヤオ族文化の一種である神画も展示したいだろう。ヤオ族儀礼神画に描かれた内容は、諸々の神だけでなく、ヤオ族の伝統儀礼及び祭祀時の場面も描かれている。それ故ヤオ族儀礼神画は、絵画によってヤオ族文化を記録した一種の教科書であると考えられる。盤王祭に参加する人々は祭壇に掛けられた神画に描かれたものを見て、ヤオ族の伝統文化の価値を再認識できるのである。この点において神画はヤオ族の伝統文化の継承につながる大きな価値を持っていると考えられる。

しかしながら神画が盤王祭の舞台に登場するのはやはり1つの地域の特例であり、規模によって異なるものではない。当然盤王祭の内容の重要な一環として捉えることはできないと考えられる。

おわりに

本稿では、広西省恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村で行われた盤王祭を事例として、神画の読み取り及び祭りにおける神画の使用の両面から神画を考察した。黄泥岡村の盤王祭においてヤオ族儀礼神画を使用することは、他地域に比して独自の地域性であるといえる。そこからこの地域の盤王祭の特性が見えるといえよう。

興味深いのは、この地域では、他のヤオ族地域にないヤオ族儀礼神画の種類（王姥神画・庫官神画）があることである。これを除き、他の神画の種類についてはほぼ共通していることも確認できた。また神画の読み取りを通して、神画の図面の構成・神々の姿勢・服装・持ち物・眷族などの基本特徴は他地域のヤオ族儀礼神画と比べてほぼ一致していることが分かる。比較研究により、神画に描かれた基本的な内容が見えてくる可能性があると考えられる。

恭城ヤオ族自治県のヤオ族儀礼神画は筆者が今まで把握できた神画の中で、製作年代（1995年）が一番新しい神画である。隣接している湖南省の藍山県の神画は比較的古いものとする。最も古い神画は道光9年（1892年）に製作されている。なぜ恭城ヤオ族自治県の神画が新しいかというと、絵師がまだ生存しているためである。故に新たな神画を製作することができる。絵師はどのように宗教職能者に依頼され、どのように神画を製作し、新たに製作された神画はどのように開光され儀礼に使用され始めるのか、この一連の過程は神画使用の重要な一環として研究すべきであるとする。また神画の製作法を調査することは絵師がいないヤオ族地域の神画の伝承において重要な意味を持っているとする。これは2013年度の課題として進めたい。

注

- (1) 現在「神画」という用語の使用例は少ない。「神画」という用語が用いられているのは管見では浅野春二が「道教儀礼と神々」（『道教の神々と祭り』2004年、175頁）や「神画と道教儀礼」（『道教の美術 TAOISM ART』2009年、84頁）で用いており、さらに丸山宏「道壇と神画」（丸山、2010年）において台湾南部の

- 道教儀礼を行う際に祭壇に掛ける神々が描かれた掛け軸についても「神画」という用語を用いている。
- (2) 「行師」とは、海旛張趙二郎、総壇、太尉、唐・葛・周三將軍の4点の神画のことを指している。
 - (3) 神画は宗教職能者が持つ兵隊の一種であると考えられている。ここで行われた「合兵合將」という儀礼は、他人の神画を自分の兵隊と合併し、自分の兵隊に組入れることである。
 - (4) 「三清」神画とは、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊の神画3点のみを示すのではなく、それら3点の神画を含めた一組の神画を「三清」神画と呼ぶ。
 - (5) 張勁松『藍山縣瑶族傳統文化田野調査』（張、2002年）の「第三章還家願」には、湖南省永州市藍山県匯源ャオ族郷で行われた還家願儀礼の祭壇について記述がある。それによると「祭場の左・正面・右に神画を掛ける。左と右に各4幅ずつ掛ける。正面に10幅掛け、全部で18幅である。左から正面に向かって掛けられ、神画の名称は、馬元帥、地府、大海番、小海番、李天師、十殿、聖主、太清、玉清、上清、玉皇、総聖、張天師、太上老君、天府、水府、雷神、鑿齋使者などである」と記されている。
 - (6) 廣田律子「中国湖南省ャオ族儀礼の道教的性格——湖南省藍山県馮家実施の還家願儀礼」（廣田、2011年）には、湖南省藍山県馮家で行われた還家願儀礼で神画を掛けることについて記述されている。それによると「神像の描かれた軸を掛ける。軸は18面で正面に総壇・聖主・靈寶天尊・元始天尊・道德天尊・玉皇・太歳、左側に李天師・小海番・海番・地府・把壇師、右側に十殿閻王・張天師・馬元帥・三將軍（唐・葛・周）・天府・鑿齋大王を掛ける」とある。
 - (7) 拙稿「還家願儀礼における神画の使用について」では、2011年11月に湖南省藍山県所城郷で行われた還家願儀礼の掛聖（神画を掛けること）について述べた。この報告では「祭壇の右側から左側まで、鑿齋大王・天府・三將軍（盤XG所蔵）・三將軍（盤BG所蔵）・張天師・張天師・総壇（盤BG所蔵）・総壇（盤XG所蔵）・玉皇・靈寶天尊・元始天尊・道德天尊・聖主・太歳（盤BG所蔵）・太歳（盤XG所蔵）・十殿・李天師・地府・大海番・海旛張趙二郎（盤BG所蔵）・海旛張趙二郎（盤XG所蔵）・把壇師とし、全部で22点」である。
 - (8) 山下和正氏が収蔵しているャオ族儀礼神画である。本資料は神奈川大学ャオ族文化研究所所蔵である。
 - (9) 「仙橋」とは「大道橋梁」のことを指していると考えられる。これは細長い絵巻のようなもので神画の一種である。
 - (10) 山下和正氏が収蔵するャオ族儀礼神画である。本資料は神奈川大学ャオ族文化研究所に所蔵されている。
 - (11) 湖南省永州市藍山県太尉神画に書かれた銘文である。資料は神奈川大学ャオ族文化研究所に所蔵されている。

参考文献

- 葉明生『中国伝統科儀本彙編（一）福建省龍巖市東肖鎮閩山教廣濟壇科儀本彙編』新文豊出版公司 1996年11月
 徐宏図『中国伝統科儀本彙編（二）浙江省磐安縣樹德堂道壇科儀本彙編』新文豊出版公司 1996年11月
 段明『中国伝統科儀本彙編（三上）四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本彙編』新文豊出版公司 1996年11月
 毛礼鏞『中国伝統科儀本彙編（七下）江西省高安縣浄明道科儀本彙編』新文豊出版公司 1996年11月
 干宝 竹田晃訳『搜神記』平凡社 昭和39年1月1日
 張勁松『藍山縣瑶族傳統文化田野調査』岳麓書社 2002年
 黄建福「盤ャオ神像画研究」広西民族大学修士論文 2008年
 廣田律子『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 2011年
 廣田律子「構成要素から見るャオ族の儀礼知識——湖南省藍山県見過山系ャオ族の度戒儀礼・還家層・儀礼を事例として」『國學院中國學會報』58輯 2013年3月
 毛漢領 陸葉「保護ャオ族郷村盤王節非物質文化遺產の意味と策略——以恭城ャオ族自治県西嶺郷新合村盤王節為例」広西民族大学学报第33卷第2期（哲学社会科学版）2011年3月
 周飛戩「永州盤ャオ神像画」『民族芸術研究』第3期 2011年
 廣田律子 三村宜敬 佐川潤子 内藤久義 譚静 大木都志男 財津直美 李利 白莉莉 神奈川大学歴史民

俗資料学研究科『神奈川県歴史民俗資料学研究所 第二十二集・中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』神奈川県歴史民俗資料学研究所 2011年

廣田律子 三村宜敬 譚静 大木都志男 財津直美 岡田浩司 神奈川県歴史民俗資料学研究所『神奈川県歴史民俗資料学研究所 第二十四集・中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』神奈川県歴史民俗資料学研究所 2012年

譚静「ヤオ族儀礼神画の研究——中国湖南省藍山県匯源郷湘藍村を事例として」神奈川県歴史民俗資料学研究所修士論文 2012年

譚静「還家願儀礼における神画の使用について」神奈川県歴史民俗資料学研究所『神奈川県歴史民俗資料学研究所 第二十四集・中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』神奈川県歴史民俗資料学研究所 2012年

写真集及び図録

Jacques Lemoine『Yao Ceremonial Paintings』Copyright by WHITE LOTUS CO. LTD. in Bangkok 1982年

齋藤龍一『道教の美術 TAOISMART』大阪市立美術館 2009年

『地獄と十王図——テーマ展図録』神奈川県立金沢文庫 1991年12月

左漢中『民間絵画・湖南民間美術全集』湖南美術出版社 1994年4月